

日本・韓国の色彩に関する比較研究 衣を巡る伝統色と若者達の官能調査から

A Comparative Research on Colors in Japan and Korea

A Study on the Traditional Colors Clothes and the Sense of Young

訪問研究員

白 淑 子*
Sook Ja BACK

デザイン学科

鈴木 信康
Nobuyasu SUZUKI

色を使う歴史は古く、生活様式、風俗に深く関わる。自然環境の中で得た色彩感覚は個人と集団に、装飾、伝達、表示、などの使用は各国の民族性文化と共に独自の表現を持つに至った。

今日の情報社会の環境は世界中の色彩が氾濫して、度々の流行現象もある。その渦中にある若者達は固有の色彩をどの程度保持しているのか、色覚はどうであるか、研究は隣接国で中国の影響を受けた同文化圏に含まれている日本と韓国を対象にして、衣を中心の伝統色彩を共通の関連性、特徴を考察して、現代の若者を対象に官能調査を行い分析し比較検討した。

日本は自然の中で見かける色彩、特に季節の変化による花の色彩に対する表現が多く、曖昧な中間色を好み、個人の感性を重視する特徴がある。韓国は色彩に対する考え方が異なる、中国より伝わった陰陽五行思想と儒教を基盤にした色彩で、それ以外は物の自然色彩として扱われた。表現は図式で自然物の尊厳を現す、宇宙観の思想が根底にある。この文化環境の差は封建社会の長期間が形成と定着に至った。

II 伝統色彩の考察

1. 日本人の色彩感

感覚を重視して自然美を感覚的に取り入れて感情を色彩に託して表現する感性の色彩文化は中国の影響から脱する平安期より始まる。

伝統色相名は自然の事象から優美な名前が命名さ

れ、多くの詩歌と紀行文にも登場して人間の感傷的な面が季節とか花の色で命名された、湿度の高い風土は色相、明度に微妙な影響を与え中間色を増大させ、「柔らか、清らか、強さ」の調和を生んだ。

染料名の似た色は平安時代以前より大陸からの舶来品である染料を配合、重ね染め、媒染剤の工夫で微妙な色が造られ原産地の色とは別な日本の色調に変化した。それは複雑な深い味の中間色をつくる要因になり、色彩の自由な使用は色数を豊富にさせて色群を形成し、独自の調和に至る。

両国の色彩特徴では無彩色観がある。古来、日本人は白に清浄無垢、潔白を表わし、神事の神聖な色として、神代の最高色に位置づけした。白と黒は有彩色の色彩飽和感における最終の選択色である。では中間の灰色の場合、平安時代に白と黒は独立したがその間の無彩色系の色は濃・薄の修飾語で表わし、いぶし銀が代表する灰色であった。江戸時代は茶色とともに鼠色が濫用されて灰色の色名よりも鼠色が広く用いられて灰白色が白鼠となり、鼠という表現が無彩色を代表して中間色調は二百以上に拡大した。鼠色は茶や藍とともに万能の色彩表現として使われた。(図1)

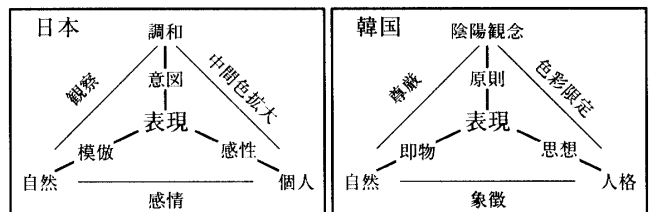


図1

2. 韓国の色彩観

韓国の色彩意識は朝鮮王朝と以前(古朝鮮時代)とは異なる, 人格と形式, 規範を重視して儒教的思想と陰陽五行の宇宙観によって形成された概念の色彩観で美的感受性とか心理反応よりは意味中心の図式の合理が支配する。たとえば「鶴は白色, 松竹は青色」で代表して人格の高貴な意味を持つ理想的な人間像のイメージで固定している, 儒教では2色は長寿の意味を持ち, 色彩が感性とは異なる。日本は鶴と松のモチーフが同意味を持つ。

乾燥した風土は明度の明るい色調と暗い色調で中間色では両極に別れている。彩度の高い色の限定色彩と自然物の材質色である。極端な濃淡の色調群で調和は「簡明さ, 清らかさ, 温かみ」で形成されている。

・韓国の白色観は自然と同化の概念が基本にある, すなわち素材の着色表現よりも無色に脱色した白で材質本来の素白である。日本語の形容詞で相当する意味では「さっぱり, 清潔, 崇高」である。愛着の強さは生活様式に深く浸透している。灰色の使用例は少なく, 黒は階級服の一部と帽子のような派手過ぎる色として扱われ, 灰色の僧服, 東洋画を除けば少ない。

喪服は麻の素白である。

食, 住の文化でも白と素色で構成される。

ちなみに無彩色では中国は黒, 日本は灰色, 韓国は白に衣服の好みが大別される, また紋様の配置では全面に埋めた紋様の中国に対して, 日本は間の空白を持つただらであり, 韓国は白の無地に大別されよう。

II Munsell Color System の表作成

1. 日本の伝統色彩系の表作成 (チャート)

日本の伝統色は大日本インキ化学のDICサンプル(総300色)を基本色としてMunsell Color Systemに適用させて総278色を選び, 分類して同時に各色相別選定を行った。

5 Red (36色) / 5 Blue Green (19色)

5 Yellow (56色) / 5 Purple Blue (38色)

5 Green (24色) / 5 Red Purple (37色)

5 Green Yellow (28色) / 5 Purple (40色)

選ばれた色相の色名と色測定 (L,a,b)で作成した

2. 韓国の伝統色彩系の表作成 (チャート)

韓国の伝統色彩系表示はまだ確立していませんので国立現代美術館編の伝統標準色名及び色相の1, 2次試案を参考にして, "韓国の美" (中央日報 発行) など13種類 (民書, 衣装, 装身具, 胸背, 工芸品など) の文献で追加選定した色を基礎にした。

日本と中国の伝統色, 日本のDIC カラーガイド Color Sample から近似色を選定した。

その結果 総292色であった。

各色相別で8表に分類して, 明度は10段階, 彩度は9段階に設定し作成, それを基に色測定表も同時に作成した。

伝統色表の分析結果

1. 中間色は日本が多い。(日本5 : 韓国3, 5)

2. 全体的に韓国は散っている。

3. 明度の高さは韓国。(Value7,5以上)

4. Blueは両国ともに同数程度あり, 紺色系は日本が多く, 青緑は韓国が多い

4. Yellowは両国とも同様であるが金茶系は日本が多い。[Chroma12~14. Value7~8]

5. 日本は灰色系の色相群に集中している。

[Chromma 0~8. Value 2~8] (図2, 3)

III 両国の有彩色

A 両国の有彩色 日本

中国を含む3国の色彩で赤は日本のイメージが緋 (Vivid Yellowsh Red) 中国 朱赤 (Bright Red) 韓国 牡丹紅 (Peony Red) の差異がある。両国は共に中国の影響による服飾制度の衣服令を公布して, 濃い色の染色は高技術を要して経済性で階級服飾に利用した, 官僚と貴族の階級色である。濃淡と色相の増加は平安時代の紅染めに認められる。彩度では赤色を巡る象徴と愛好, 紫色は単に高地位の象徴色のみならず, なまめかしさ, 気品の意味の表現も含まれ平安時代の紫色に確立した賛美と憧憬は今も続く。彩度の高い赤と紫,

を規定した。その思想は自然哲学として木、火、土、金、水が地球上の基本的な構成の五元素で絶対視され。五行循環が生活習慣に深く拘わる。

・五行では黄、白、黒、赤、青（注1）が基本色で宇宙生命の五原色である。五正色、五彩と呼び、五方位の挟む色が陰色として五間色、緑、碧、紅、黄が五方の間色で補助の構成をする10色が陰陽の基本である。四季（注2）も同様。

正色と間色を組み鮮明な関係の組み合わせで伝達、表示、などを重視する。

・衣生活の服飾制度は形態、紋様、色彩、織物の種類等は身分で制定された。中国の服飾制に従う色彩で階級は上流階級の権威、官制の身分を定めた。彩度の高い色は貴族階級に限定される。しかし平常服は白服が主であった。

多数の一般庶民たちが白衣であった背景には、

1. 経済的な問題
2. 禁色令の公布
3. 加工材の不足 これらの理由で常用された。

布は無地が主で後加工の表現は刺繍、金箔、等のワンポイントである。しかし色数は少ないが、仕事着では済州島の柿渋染めの濃い茶、谷城の麻は杷子で染めた黄茶色の淡い色、子供の晴れ着、ボソン、ノリケ（注3）の装飾、李朝の風俗画（注4）に見られる遊女の華麗な服色もある、明度は上下の明と暗に片寄る特徴を持ち、同時に彩度の高い色調の両面がある。

・儀式服色も五行で構成され。濃い色は貴族階級が、薄い色は庶民の儀礼服に時には活用された。食生活における伝統色彩の使用は五行思想の定めで”三白”すなわち白御飯、大根、白沸であり食事は灰色調で、白餅、お菓子、等も淡い灰色調である。この食の色彩は朝鮮時代に確立した。しかし”Ko Myung”（注5）は豊かな色彩の視覚的な効果を有する食事もあり、時には庶民も祝苑は宮中のような陰陽五行に従う食習慣もありました。食器等は金属の鉄、金、銅製、木、紙の材質色と淡泊な白色の陶器に濃い有彩色の飲食物と対比する「強烈さと淡い、温かみ」である。

住生活の中の色彩は五行思想による強烈な色彩の配色は古墳とか寺院などの丹精（注6）にある

が全体では原色を組み合わせた華麗さが目立つ。しかし、一般の伝統家屋における色彩は無加工の自然材質色で木造の柱、天井は韓紙を貼り、オンドルの床は韓紙を敷き茶系で明るい室内の保持を行い、壁は木製家具の暗褐色調と強い対比を醸す。すなわち室内は茶系の彩調で屋外の自然に同化した弱対比で安定感を保持する。アクセントは座布団、枕の赤、青、黄による。

（注1）五行では黄色=HAWANG、白色=HINSAK、黒色=KUMJUNGSACK、赤色=BANGKANGSAK、青色=CHUNCHUNG、五間色、緑=LUCK、碧=PARANG、紅=HONG、黄=BORA

（注2）青春=青、朱夏=赤、白秋=白、玄冬=黒。

（注3）ボソンは靴下に相当する履物、またノリケはチョゴリの外のコルム（結紐）およびチマの腰部に付ける装身具の一種である。

（注4）Miindo 薫園甲潤福風俗図に朝鮮時代の風俗を描き、遊女と両面の遊ぶ場面、美人図、など、作者不祥。

（注5）Ko Myung :料理の薬味をかねて飾りにあしらう具の物の総称。

（注6）丹青：広い意味としては色彩で描いた絵での絵を一括して呼ぶ語。一般的には木造、石造など建築物に荘厳さを与える装飾物、および工芸品の装飾と図、書を総称。

狭い意味としては赤と青の2色であるが家の壁、柱、天井と構築物に様々な紋様と配色で主に青、赤を中心に黄、白、黒を加えた五色を基本にした装飾全体を指す。

日本・韓国の色彩官能調査による比較分析

両国は第二次世界大戦後における欧米化は色彩感覚に変化を与え、情報化の進む現在では似た状況である。一方では両国に跨がる製品化の企画担当者からは固有な色彩の存在の指摘もある。

1. 調査方法、内容

両国の20才前後の男、女を対象に7調査サンプルを作成して、配色と色彩の選好、選好の理由である形容詞を集計してその結果を分析した。両国の特徴的な色彩の意識度に対する目的で韓国はソウル市、忠州市、釜山市と日本は福岡市、赤間市、神戸市の両国の2地域の3市を対象として1998年4月5日/20日までの期間に両国内で同

時に実施した。

本調査の質問書 (Color Sample) 作成は Power Macintosh 7600 /120 Computer. Phather III を使用した。

調査資料の内容 (1~3)

1. 2, 3 色の組み合わせは両国で各々二つのサンプルを選定して割り線の使用と無使用を提示して色彩イメージの差を調べた。

2. 文様の場合, 両国で共通に理解できるように花, 雲文様と両国の伝統的雰囲気を生かせる紋様を選択した。

3. 配色は暖色と寒色のイメージ, 古典的な色彩と現代的色彩の調和を意図した。

4. 質問事項は選好色彩に対するイメージを把握するために 3~10 個の形容詞表現で選択させるようにした。両国の共通な意味の形容詞を選び, 設定した。しかし両国の言語に適当な言葉がなく割愛した形容詞もあり今後の検討課題である。調査サンプルは (図4) を参照

調査実施地指域及び対象者数

	日本		韓国	
地域	福岡	神戸	ソウル	釜山
男性	6	0	37	35
女性	45	23	38	27
合計	74		110	

調査データのグラフ

- 1, 縞による 2, 3 色調和
- 2, 花と雲文様色彩調和
- 3, 伝統文様の色彩調和 (選択理由と人数) (図5)

結果の分析

・ 1 の縞による 3 色調和では両国すべて自国固有の色相と組み合わせを選択している。

日本の場合 Pink / Gray / Purple,

韓国の場合 Yellow / Red / Blue を選好した。

2 色調和では

日本は Blue / Purple, Yellow / Purple,

韓国は Blue / Purple を選好して固有色相に対しては 3 色調和が目立つように現われた。

選択理由では日本はきれい, 韓国はさわやかが多

い, 日本は濃淡を含み, 韓国は同濃度である。

日本: 隣接色は調和感を大切にする傾向である。
韓国: コントラストの明瞭さを求める相違があり両国の色彩感覚が現われている。

伝統色の中間色, コントラストの強調の両国感覚が示されている。(図6)

・ 2 の花と雲文様では主に 2 色の同色系列を選好して, 理由は上記と同結果であった。(図6)

・ 3 の伝統的文様の配色も日本はきれい, 韓国はさわやか, 日本は水色と Blue 系列の色相を選択して, 韓国は Blue, Brown 系列の同色調和を好む。(図6)

小林 繁の Color Image Scale による Image MAP では好む配色を個々の色に当てはめた場合には両国が同じ結果の古典的, 清潔感のイメージを持つ範囲に属する。

しかし差異では日本が「きれい」の色群に属する色彩のイメージで選択に働く, 韓国はカジュアル, 現代性に属する色群のイメージで色彩を選択する, 日本は色彩の柔らかさや暖かみの情感が認め

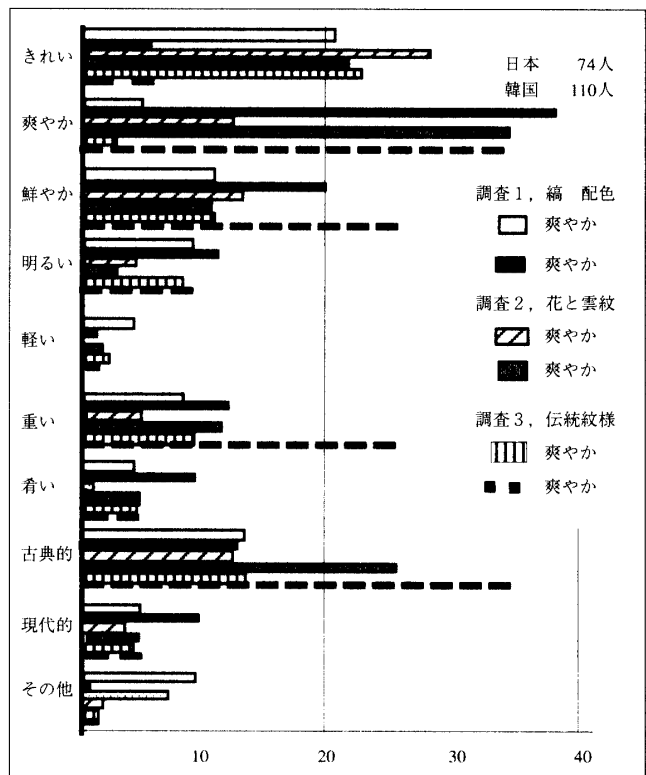


図4 色彩調査1~3の形容詞選択人数グラフ

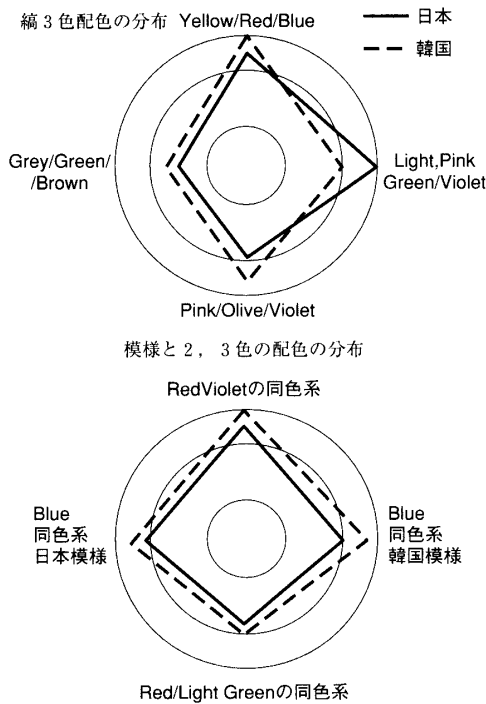


図 5

られ、韓国は現代性に冷たい、強い刺激で感じ、暖かさに親和のイメージを抱く。

注：1966年Shigemori Kobayashi によって設立「日本色彩デザイン研究所」で開発した研究方法の「意味の伝わる語彙，視覚の表現色彩」を分類して体系化した方法。

調査資料の内容（4～7）

4、紋様の大小

質問は両国の伝統模様から各1パターンを選択して大柄と小柄の4サンプルから選好した，また理由は6項目の形容詞を用意した。

形容詞群は「繊細，大胆，派手，地味，可愛い，親しみ，その他」である。

5、白地と黒地の場合

水玉の模様で暖色群と寒色群の配色にて背景色を白と黒の4サンプルを作成した。

選択理由の形容詞は「可愛い，明るい，若い，鮮やか，軽快，現代，地味，その他」である。

6、バラの花をコンピュータ処理による表現の4配色から好みにより選択する。

表現の輪郭線を持つ場合の好嫌を尋ねる。

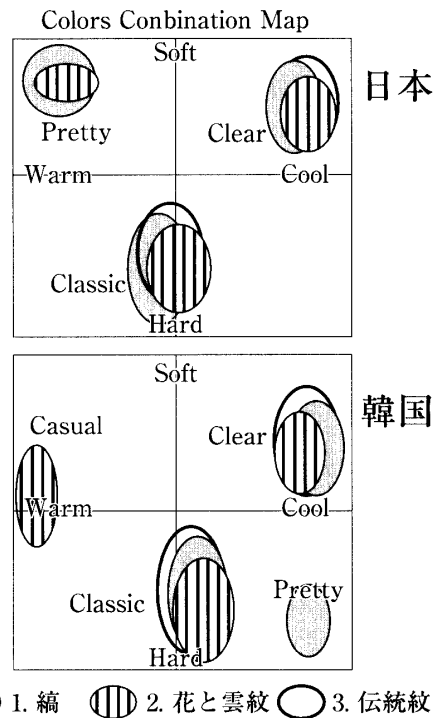


図 6

7、パール・トーンの明るい色調の調査

30色（赤，黄色，灰色，紫，緑，青）を5段階に分割した。好み色の選択する。

使用例を（服地，室内布，マニキュア，紙製品，等）から選択する。（図4）

調査結果の分析（4～7）

4・文様の場合では自国の伝統文様を好む。

また伝統文様の全体の雰囲気を見られるサンプルと同じ文様の部分拡大して見せたことは大，小に関わらず自国文様を選好した。（図7）

日本は紋様に繊細さ，可愛いらしさの小柄を好み，韓国は紋様に親しみの理由で小柄を選び，大胆，地味の理由で大柄を選んだ。工芸品の美意識における価値感の形容詞との関係では（共同研究デザイン学会発表の工芸における韓国と日本の美意識）と共通する部分が確認できた。（参考文献25）（図8）

また紋様と色の選択（3～5）では複合した問い掛けに価値感を両国は持ち日本人は「可愛い」を軸に「繊細と大胆」，「親しみと地味」が動きそ

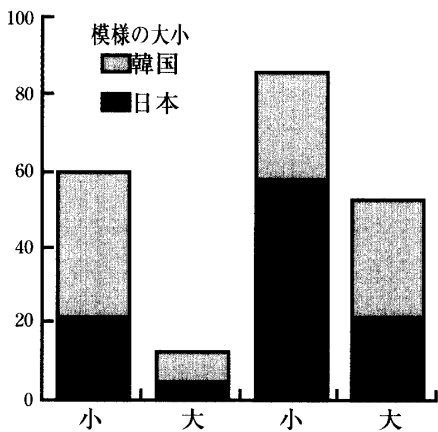


図7

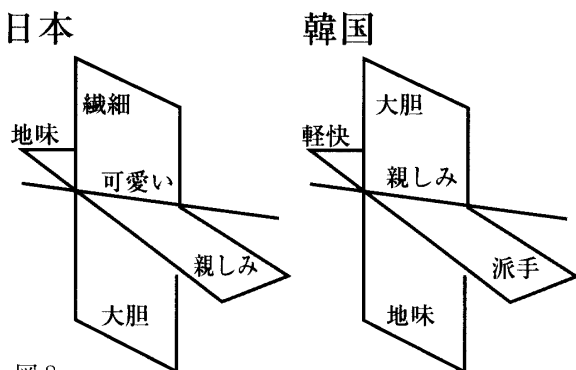


図8

の交点を定める、韓国は「大胆と地味」、「軽快と派手」の交点が前後左右に動き決定するのが「親しみ」である。交互の動きで決まる。

5・無彩色の感覚は日本は地色が黒地にBlueの雰囲気、韓国は地色が白地にBlueの雰囲気を好むという結果がでた。(図9)

また形容詞の選択では

形容詞	可愛い	明るい	若い	鮮やか	軽快	現代	地味
日本	21	6	4	7	17	8	9
韓国	6	18	14	23	34	5	8

回答者数 日本72人、韓国118人 無回答3人

この結果が示すように可愛いを選択は黒、白地に関わらず日本は選択し、韓国は黒地を好まず白地では日本と共通の理由で軽快。

6・バラの花は赤のイメージが一般的であるが調査結果では青を愛好している。(図10)

日本はどの配色にも人数がいるが韓国はピンクと

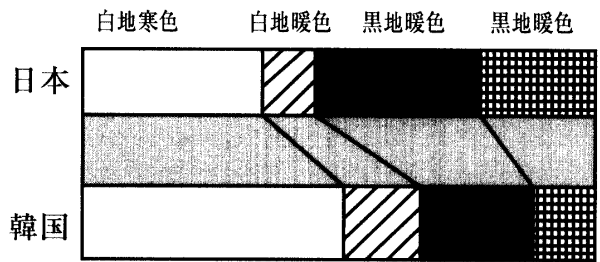


図9

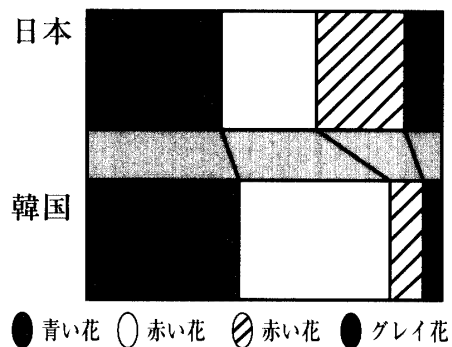


図10

グレイに少ない、中間色と無彩色に差がある。

現実の花の印象は赤であるが好みは明らかである。輪郭線は日本が好み、韓国は反応が鈍い。これは量感と色面に対して平面感と立体感が少し異なることにある、しかし縞の模様(調査1)では量感を問わない平面で不明確な結果である。

7・パールトーン調査では日本は水色、韓国はベビーブルーを好み、両国は共通のBlue系列を選好した。(色はDICの番号)

	N-872	N-870	C-161	N-820	N-916	N-820
日本	29	5	8	4	3	3
韓国	8	10	9	8	9	8

明度の高い場合の色覚は韓国が高く、日本はやや低い色の差があった。用途は両国共に服地が一番多いのは女性が回答者に多く、男性は無回答が多かった。また壁紙が韓国に多くあり室内の明るさを重視している特徴がある。

結び

7種の調査と各々の内容による分析結果の総合では以下のことが判明した。

イ、両国には好みの一致が見られる色彩は青でモノ・トーンの好みは共通する。

ロ、澄んだ、清らかな美と古典美の両国共通なイメージの好みの調和を持つが、日本は温和な調和を美しいと感じて、韓国は暖色系の調和に親密さを抱き、寒色系の堅い調和に現代を感じる感覚の差を持つ。

ハ、Bright Pastel & Dark Combination は韓国、日本は Pastel & Smoke Combination で明確な、強い色彩と暗い色調の韓国。中間色とくすんだ色調の日本の差がある。

ホ、紋様では自国紋様に親しみを抱く。

ヘ、形容詞の調査では色彩の価値感に対して日本人はきれい、可愛い、繊細であり。韓国は爽やか、重厚感、現代性である

ト、線ぐくり日本人は好む平面性を持ち韓国はこだわらない。

チ、白に近親感、黒の反応が鈍い韓国、日本は白と黒に拘束がなく、灰色を好む。

リ、現在の両国の若者（20～25才）には伝統的な色彩の好みに継続が残る。

一衣帯水の両国では伝統の形成と環境が異なる、民族性の比較は両国の感覚、文化をより理解する手がかりを与える。

今回の調査に協力をして戴きました両国の学生達と関係者に対して厚く感謝する。

※白 淑子は1997年12月1日～1998年5月31日まで建陽大学校美術学科より訪問研究員で研修した。

< 参考文献 >

書名	著者	発行	年度
1 日本の伝統色	福田邦夫	読売新聞社	1987
2 小風	国立歴史民俗博物館	朝日新聞社	1990
3 辻が花	切畑健	京都書院	1984
4 明治の輸出工芸図案	田豊次郎	京都書院	1986
5 唐草紋様図鑑	吉本嘉門	グラフィック社	1984
6 江戸更紗	浦野理一	文化出版局	1980
7 千代紙文様	京都書院編	同出版	1982
8 日本の文様1/18	今永清二郎	小学館	1987
9 色の歴史手	吉岡幸雄	PHP研究所	1995
10 カラーイメージ感覚	小林重順	講談社	1986
11 日本カラーデザイン研究 すまいの色彩	L・チエスキ	白揚社	1970
12 美しい和食品の本		講談社	1984
13 懐石伝書	辻嘉一	婦人画報社	1943
14 世界大百事典		平凡社	1989
15 朝鮮美術史	アンドレ・エックルト	明石書店	1974
16 韓国の服飾	柳喜卿・朴京子	韓国文化財保護協会	1982
17 韓国の伝統色	河龍得	明志出版社	1986
18 色彩心理 韓国紋様史	林永周	美進社	1983
19 韓国人の生活紋様	慎相宰	先進文化社	1982
20 韓国文様事典	林永周	河出書房新社	1988
21 デザイン学研究2 2号韓国デザイン学会			1997
22 中国の色彩イメージ 共同	田中みなみ他3名		
23 染織遺物から考える朝鮮時代の色彩特性	Lee Kyug Hee		1997
24 デザイン学会4 3回 発表	韓・日伝統色彩意匠の特性 李 景姫		1996
25 伝統工芸品における韓国人と日本人の美意識の比較調査	Yun Hyung - Gun		1997
26 色彩イメージ調査に基づく価値観の民族比較	共同 Lai, Chiong-Chi Zhao, Ying, Yu 他2名		1997
27 韓国の美(民画)	(金哲淳)	中央日報	1979
28 "服飾"外7圏	Jo Hyo Soon外 DaeWon Sa		1969
29 "胸背"(民俗学資料第一)	石宙善	檀国大学校附属	1979
30 石宙善記念民俗博物館 湖庵美術館名品図	三星美術文化財団		1971
31 韓国の美(線,色,形) Choi Sung Ja	知識産業社		1993
32 伝統染色工芸	韓国文化財保護財団		1997
33 韓国の美(衣装,装身具)	国立中央博物館		1988